
 学 会 記 事

第18回新潟てんかん懇話会

日 時 平成8年11月9日(土)

午後3時～6時

会 場 新潟大学医学部

第2講堂

I. 一 般 演 題

1) てんかん患者にみられる精神症状について

前田 雅也・和知 学 (国立療養所西新潟
中央病院てんかん
センター精神科)
笹川 睦男・長谷川精一
金澤 治 (同 小児科)
亀山 茂樹・福多 真史 (同 脳神経外科)

【緒言】てんかん患者では、精神症状の併発によって社会的自立が困難となっている例がしばしばみられる。発作の抑制とともに精神病状を把握し対処することが、てんかん患者の治療の上で重要である。精神症状は発作に関連して主に意識障害時に出現するものと、意識障害を伴わずに出現するものとに分けられるが、今回我々は意識障害を伴わずに出現する精神症状のうち、分裂病様症状や躁うつ病様症状などの精神病症状について調査した。

【対象, 方法】1995年7月から96年9月までの15カ月間に国立療養所西新潟中央病院てんかんセンター精神科を受診した16歳以上のてんかん患者を対象として、診療録をもとに精神病状を呈した症例の特徴について検討した。

【結果, 考察】精神病症状の出現頻度は対象患者681名中39名(5.7%)で、分裂病様症状が29名(4.2%)、躁うつ病様症状が10名(1.5%)であり、従来の報告とほぼ同様の値となった。てんかん罹病期間の平均は分裂病様症状群は23年で分裂病様症状のみられぬ群の18年に比して有意に長かった。躁うつ病様症状群のてんかん平均罹病期間は21年であった。てんかん発症から精神病症状出現までの期間に関しては10から22年という報告が目立つが、今回の調査でも平均16から17年を要しており、先行研究を支持する結果であった。てんかんの類型別に精神病症状の出現を調査したところ、症候性局在関連性てんかんと特発性全般性てんかんのみに症状出現がみられ、

また局在関連性てんかんと全般性てんかんと比較では、前者に精神病症状出現頻度が高い傾向がみられた。分裂病様症状の状態像としては慢性の幻覚、妄想状態が最も多く、躁うつ病様病状では挿間性と慢性の抑うつ状態がほぼ同数認められた。てんかんにみられる分裂病様症状は精神分裂病と比して陰性症状や自我障害の出現が少ないとされており、今回の調査でもその傾向は認められた。さらに分裂病様症状を有するてんかん患者と精神分裂病患者では、対人関係における暖かさに顕著な差異が認められる印象を持った。頭皮上脳波による棘波の局在と精神病症状との関連は認めることができなかった。抗てんかん薬と精神病症状との関連に関しては、ゾニサミドが関与していると考えられる希死念慮を伴う抑うつ状態が1名認められ、ゾニサミド使用時には精神症状の評価に十分注意をはらう必要があると思われた。

2) 経過中に運動性失語状態を呈したてんかんの1例

東 條 恵

(新潟県立はまぐみ
小児療育センター
小児科)竹内 菊博・笠原 良隆
壁屋美奈子・岡田 立平 (刈羽郡病院小児科)

症例；現在14歳6カ月男児。診断；軽度精神遅滞，てんかん(単純部分発作，二次性全般化発作疑い)，不器用，後天性運動失語，場面かん黙傾向。病歴；8歳8カ月，口を少しあけ，顎をがくがくさせることが，週1から2回出現し，徐々に眼球上転を伴うようになった。発作は睡眠中は1度だけ，後は覚醒時であった。脳波で多焦点性棘波(右C，左mT)，頭部CT，MRIではシルビウス溝の軽度拡大以外特記すべき所見はなかった。てんかんの診断のもとCBZ 250mg/日が開始され，一時コントロールされた。12歳0カ月頃，口を開けないで話すようになった。12歳9カ月には伝えたいことが有るときには母へ，内容を紙に書いて持ってくるようになった。入院時現症(12歳10カ月)；発音が極度に不明瞭かつ文章にならないことが多く，会話は成立しなかった。また，発音の省略，誤りみられた。文章，文字読みでは，誤った発音のため，何をいっているか不明。また喚語困難がみられた。筆談が主なコミュニケーションであった。しかし聴覚的理解，環境音の理解は問題なかった。検査結果；MRI所見では特記すべき病的所見なし。終夜脳波ではspike indexは50%以下で，CSWS症候群でなく，多焦点性棘波であった。SPECTでは，左前頭，側